



# 市民しんぶん 北区版 いきいき 北区

8  
2022/15

Follow Me

kyotoshi\_kitaku

北区の魅力をご紹介します!  
Instagramはこちらから→



北区を拠点に、日本が誇る様々な伝統文化や芸術の伝承・創造に活躍される方々を紹介するシリーズ企画「文化のこころ」。今回は、民俗学がご専門の京都産業大学 文化学部教授 村上忠喜さんから、北区に息づく伝統行事について、寄稿文をお寄せいただきました。



## 北区に息づく伝統行事

～五山送り火・松上げ・やすらい花の歴史と文化～



京都の夏を彩る「京都五山送り火」の前身は、室町時代に盛んに行われていた盆行事である万灯籠まんとうろうです。市中に墓地をつくることがなかった京都では、おのずと北山、東山、西山のふもとに墓地が営まれますが、そうした場所は、市中より少し高い処にありました。盆の時期に墓地で火を灯す万灯籠は、盆の設え用品を処分するとともに、人々が遠望して心を慰める風景でもあったのです。

万灯籠の灯が巨大化し、かつ文字やモノかたどを象るようになったのは、世の中が平和になった1600年代中頃になります。船形万灯籠や左大文字もこの時期に史料上に登場します。それぞれ西賀茂村、大北山村の人々の精霊送りであると同時に、遠望して鑑賞されることが織り込まれた送り火でもありました。



船形



左大文字

五山の送り火は、前身の万灯籠同様、様々な精霊をお送りする行事ですが、遠望する人々もまた、自らの縁者の精霊送りを五山の送り火に託しました。都市部と近隣農村部の長い時間をかけた文化的交流が生み出した、京都ならではの盆行事であり、時代とともに移り変わりはしたものの、今なお、市民がご先祖や精霊に思いをはせる盆の風物詩として親しまれています。



区内の4地区で伝承される「やすらい花」(国指定・重要無形民俗文化財)は、桜が散る頃に、花を飾った風流傘ふうりゅうがさを高く掲げ、笛と歌うたに囃はやされながら、シャグマ(赤熊)を被った異装の者が鉦・太鼓かねを打ちながら、町の辻々つじつじで踊りを繰り広げるといふものです。

その起源は古く平安末に遡り、現在日本各地で行われる「風流」の源流のひとつです。ただ不思議なことに、鎌倉初期から江戸時代に入るまでの間の記録が見出せません。江戸以降は現在のよう、集落の若者たちを中心に伝承されてきました。



京都の北部山間部には、8月後半に「松上げ」が行われる集落があります。行事の起源は明確ではありませんが、集落が共同して大きな火で盆の精霊を送り出すことを目的とするものである一方で、修験道しゆげんどうの影響を受け、夏山での修行後の験比べげんくらといった競技性が入り込んだ民俗行事として伝承されてきました。各地に分布する松上げ行事は、修験道の聖地に近い場所で色濃く残っているのです。

雲ヶ畑の松上げは、かつては青年たちの受け持ち行事であり、また毎年火の形を変えて見せるという、風流化したものです。



問合せ 地域力推進室 企画担当 ☎432-1199